(3)釜石市立釜石中学校の取組

三浦　誠　（釜石市立釜石中学校 主幹教諭）

1.震災当時は同じ釜石市の唐丹中学校で防災担当をしておりました。体育館を仕切って授業をやっている様子が新聞等で報道されましたので覚えている方もいらっしゃるかと思います。釜石中学校は 2006 年に市内 3 つの中学校が統合して誕生しました。現在、384 名在席しています。4 年前の東日本大震災のとき、学校のすぐ横まで津波はのぼってきましたが、幸い堤防を越えることはなくて、当時子どもたちは学校に大部分いましたが、高台に避難して無事でした。現在在席している生徒は震災当時、小学校 5・4・3 年生で、“釜石の奇跡”と言われた当時の子どもたちとなります。

2.本校のいのちの教育の目標です。防災教育を核としながら自他の命を大切にしていく資質・能力の向上、地域に対する理解と愛情から実際の対処能力です。

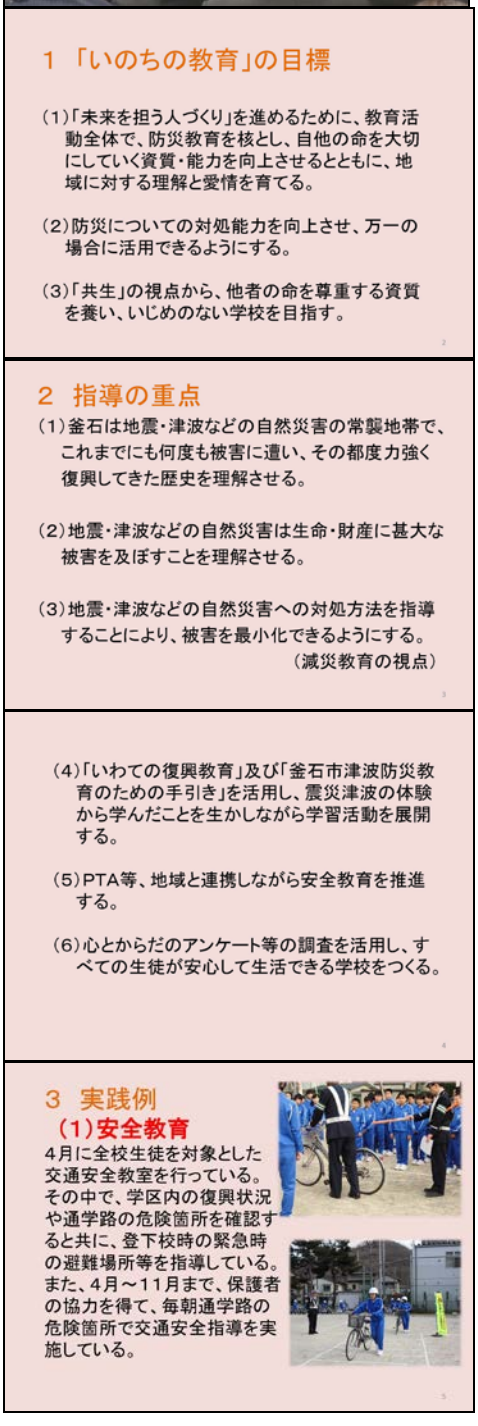
3-4.指導の重点ですが、常襲地帯で地震・津波の歴史、具体的な対処方法から副読本の活用、津波防災教育の手引きの活用、地域連携、心とからだのアンケート等の調査の活用していくことです。

5.今までもやってきた 3 つの取り組みについて紹介します。1 つ目は「安全」という視点から自転車の安全教室です。本校は市内の中心部にあり、朝夕はとくに車の交通量が多く、自転車で登校している生徒が多いので 4 月に行っています。なお、4 月～11 月まで保護者の方々に協力いただいて毎日危険箇所で交通安全指導を実施しています。

6. 2 つ目は「合同避難訓練」です。近くに保育所、仮設住宅があるのですが、合同で避難訓練をしています。全体で約 600 名近く参加しました。担当となった生徒が保育園児の手を取ったり、ベビーカーを押したりして手伝っています。

7. 3 つ目は「文化祭壁新聞」で復興関連の記事を書きましょうということで取り組んでおります。震災体験を風化させないだけじゃなく、自分たちがこれからの釜石を作っていく存在であるということを自覚していく機会となっています。

8.本校の「いのちの教育」は防災教育を核としながら、教育活動の全領域で生き抜く力を育成していくということです。



9-10.また、「いのちの教育」の取り組みについては私自身、整理してみて初めて全領域で取り組んでいるということが把握できるようになりました。今年度は「いわての復興教育」副読本を活用し、より充実させようとしております。

11.充実させるにあたって私の頭の中にあったのが、平成 14 年の台風 6 号豪雨による土石流のことでした。写真は海に近い松原地区の土石流のあとの写真です。このときに大人の方が 2 名亡くなりました。右側の写真は釜石駅前の道路が冠水したようすです。

12.岩手県ホームページの「土石流危険渓流位置図」です。黄色く見えるところが土石流の危険区域となります。赤色の丸が本校の位置、橙色の丸が学区内の小学校の位置になります。紫色の線が西側にある中学校とのおよその学区の境です。右上の黒く丸で囲ったところが大震災のときに津波の被害を受けた地域です。ここから現在 44 名の生徒が本校に通っております。また、津波の被害がなかった学区内から 302 名通っています。本来は学区外になる地域からも 38 名の生徒が仮設住宅から通っています。合計すると 340 名の生徒が実は津波の被害を受けなかったところから通っています。こうして見てみると地震・津波防災ってとても大切ですが、それと並行して土石流災害についても取り組む必要があるのではないかと感じました。

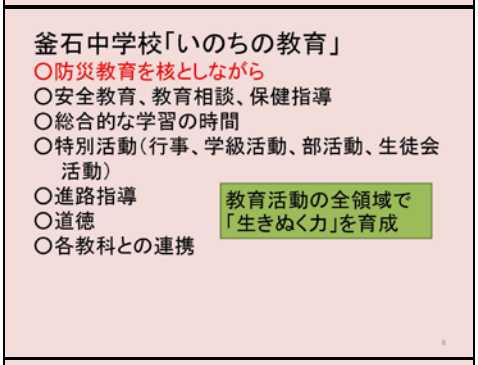
13.そこで「いわての復興教育」副読本の活用にあたって、身近な地域で起こりうる自然災害への理解ということで、自然災害一般、これを理解したうえでどうするかということをみんなで考えていくことにしたいなと思って 2 時間計画で立ててみたところです。

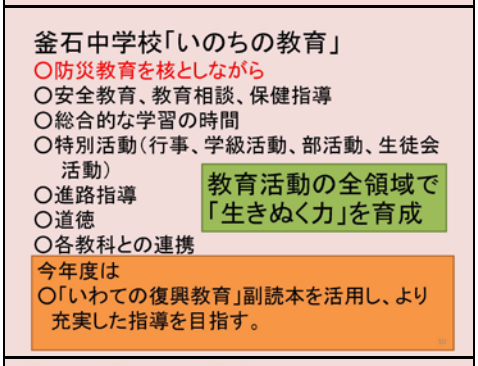
14.本時の展開ですけれど、身近な地域で起こりうる自然災害について予想のあと、資料を活用しながらわかったことを文章でまとめます。

15-18.子どもたちは資料をもとに日本で起こりうる自然災害を知り、火山噴火以外は釜石で起こる恐れはあるよねということを確認していました。

19.釜石の町内会ごとで作っている自主避難計画です。震災後、市の防災課が町内会の人たちと協力しながら、ここまでようやく辿り着きましたが、まだ学区のすべてをカバーしきれておりません。左下には予兆である崖崩れや土石流も書いてあります。

21.実際には各地区ごとに子どもたちを分けます。だいたい





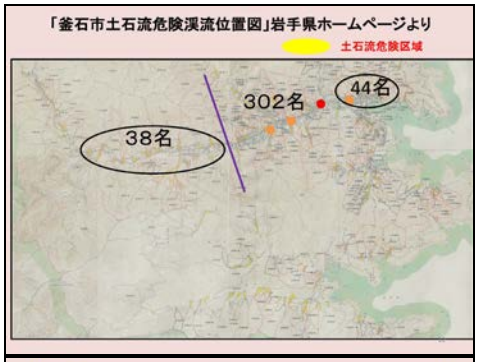
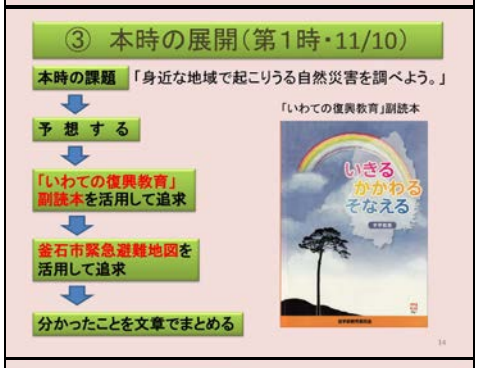
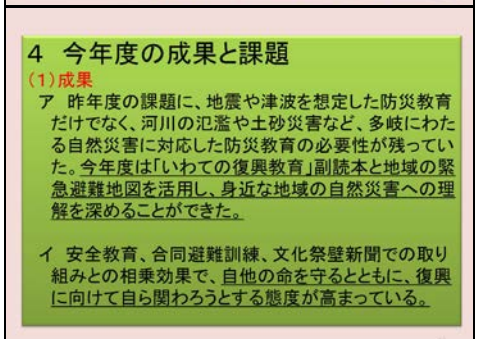
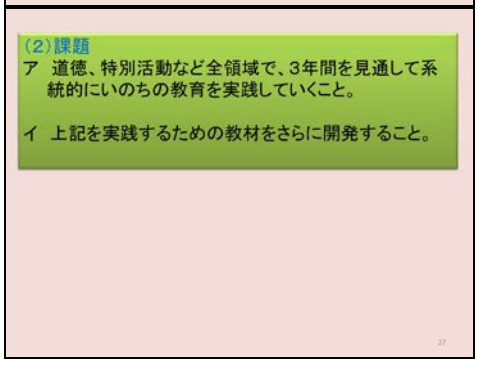
クラスを 6～7 つくらいに分けました。自分たちの住んでいる地域でどういう危険性があるかを読み取りました。

22.3 年生の生徒の感想として「昔、自分の住んでいるところの近くで土石流があったことを今日初めて知りました。また同じようなことが起きるかもしれないので自分のまわりで起きるかもしれない災害をしっかり把握して備えたい」、「自分の家は山にも川にも近いのでこれからも注意していこうと思った。甲子川の限界も知ることができたので気をつけたい。釜石の気をつけなければいけないところは思ったより、あったので身近なところは把握しておきたい」、「予兆現象に注意していきたい」と書いています。

23.さまざまな場合を想定して実際どうしますかということを考えさせる内容です。

24.一人で考えたりグループで考えたりしたあとにそれを発表しあって具体的にどうするか共有しあいました。

25.1 年生の生徒は「自分を守るときは的確な判断をすることが大切、他の人のときには指示を出したり声を掛け合うことにより命を守ることができる」、2 年生の生徒は「災害時に適切な行動をするためにどうすれば良いかを普段から考えておくことが大切だということが大切だとわかりました」と書いています。

26.成果です。昨年度、本校の課題に地震や津波だけではなくて、河川の氾濫や土砂災害など多岐にわたる自然災害に対応した防災教育の必需性これが残っていました。本年度、副読本や地域の緊急避難地図を活用してそういったことができたので良かったなと思っています。また、今まで取り組んできた取り組みとの相乗効果で自分や他人の命を守る、復興に向けて自ら関わろうとする態度が高まってきています。

27.課題です。副読本を活用した 1 時間分の授業案でしかないのですが、さきほど紹介した 3 年間の全体計画にこういったことを位置づけながら、系統的にいのちの教育を実践していくこと。また、それを実践するための教材を今後も開発していくことが課題です。